神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Intonational features in simaltaneous intonation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三島, 篤志, Mishima, Atsushi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1515

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

日英同時通訳のイントネーション

三島　篤志

1. はじめに

同時通訳研究の最大の関心事の 1 つは、通訳者が source text（ST）の内容をどのように target text（TT）として構築していくのか、それを可能にするメカニズムとは何なのかを究明することにある。ただ、通訳は最終的に構築された TT を音声化し、それが聴衆に正確に理解されてはじめてその行為が完遂することを考えると、産出された TT の統語的、語用論的妥当性はもちろんのこと、通訳者の実際の発話が target language（TL）の音声として適切であることが重要である。いくらすばらしい TT を構築したとしても、音声としてうまく聴衆に伝わらなければ通訳が成功したとは言えない。もちろん、同時通訳は高度に認知的なプロセスであり、通訳者の限られた認知資源を考えると、TT の音声表出にまで十分な注意を向ける余裕がないという現実はあり、TT が適切である限り、音声表出自体は通訳者の発話が極度に訛っているケースを別にすれば、とりたてて議論する必要がないという見方もある。そのためか通訳者の訳出の音声的側面を取り上げた研究はそれほど多くはない。また過去の研究は Williams（1995）や Aherns（2005）を除いては impressionistic な研究が中心であったり、研究対象となっている言語対がヨーロッパ系の言語同士であることが多く、系統の大きく違う言語対について instrumental な手段も駆使して通訳者の発話の音声特徴を記述することは、包括的な通訳モデルを考え上でも重要な意味を持つと考えられる。本論では、この分野の研究に寄与するため日本語から英語の同時通訳の発話を取り上げ、必要に応じ音響分析の手法も援用しながらその音声特徴を明らかにしていく。日英同時通訳の場合、これができる英語母語話者が少ないことから日本語を母語とする通訳者が外国語である英語に通訳することが珍しくなく、発音は特に問題となると考えられる。同時通訳者の発話の音声特徴を調べる研究は、最終的には通訳者のデリバリー訓練に貢献しうるべきものと考える。手順としては、1）通訳者の発話の音声特徴を調べたうえで、自然発話と比較してその適切性を吟味する、2）適切さに欠く場合は、それが通訳プロセスそのものに起因するものなのか、それとも通訳者の母語の影響を受けたものなのか同定する、3）その通訳者の発話の音声特徴が聴衆の TT の理解にどう影響しているのかを明らかにする、4）2）と 3）を踏ま

え通訳者に適切な音声訓練を施す、などが考えられる。今回は、1）の音声特徴の記述を中心に取り上げる。

通訳者の発話の音声特徴と言っても、母子音からポーズ、ストレス、リズム、アクセント、イントネーションなど取り上げるべき問題は数多くあるが、今回は特にイントネーションの特徴に絞って議論していくこととする。

2. イントネーション

ピッチ、強さ、スピードなどの変化に依存する超分節音的要素を総称して一般にプロソディーと呼ぶが、この中で1つの発話単位に見られる全体的なピッチの移動・変化のパターン（pitch contour）のことをイントネーションと呼ぶ。

2.1 特徴

イントネーションは、話者の発話内容に対する態度や、個人的、社会的属性を示したり、統語境界を明示したり、発話の特定の情報に聞き手の注意を向けさせたり、特定の文や節が談話内でどのような関係にあるのかを示すなど、活字媒体では表せない各種の情報を効果的に伝えてくれる。このようなpitch contourを持つ単位はintonation groupと呼ばれる[1]。intonation groupは一貫したpitch contourを持ち、少なくとも1つ主要なピッチの移動や変化（pitch movement and/or change）が見られ、この部分が他よりも際立って（prominent）聞こえる。

2.2 役割

イントネーションが果たす役割の中でも、特に発話理解にとって重要なものが二つある。一つは音響的連続体である発話を構造化する働きである。1つのintonation groupは統語的、意味的など、なんらかの情報単位と合致することが多く、これは聞き手にどこまでが1つのsense unitであるかを明示する上で重要な役割を果たす。もう一つは、発話内で話し手が重要だとみなし、聞き手に注意（focus）を向けて欲しいと望む情報を際立させる働きである。具体的には重要情報を含む単語や対比させたい単語（の強勢音節）などでピッチを変化させることで際立たせる。これをアクセント（accent）と呼ぶ[2]。intonation group内でアクセントを受ける単語は複数ある場合もあるが、特別な場面を想

1　他にも、word group, tone group, intonation phrase,など様々な名称で呼ばれる。（Wells, 2006）

2　Cruttenden（1997）は、stressとaccentをともにprominenceと定義しているが、stressがその実現手段は特に問わないのに対し、accentはピッチが産み出すものとして区別している。ここでも基本的にこの使い分けを踏襲する。

定しない場合、最後のアクセントで最も顕著な pitch movement が起こる。これは音調核（nucleus）と呼ばれ、特徴的な音調（tone）の型を取る。

3. 同時通訳におけるイントネーション

上記のようなイントネーションの働きは、音声コミュニケーションの一形態である同時通訳でも重要な役割を果たすと思われる。同時通訳の発話は「同通口調」などと呼ばれ、特にそのプロソディーが通常の発話から逸脱していることは、聞き手だけでなく通訳者自身も自覚している（Williams, 1995）。その逸脱はリズムの乱れ（Barik 1972; Altman 1989）、ストレスの間違い（Shlesinger, 1994）、単調なイントネーション（Altman 1989; Kurz 1989）など広範囲に及んでいる。イントネーションは特に通訳者の評価にも大きな影響を与え、誤訳を含んでいても生き生きとしたイントネーションで訳出していれば、単調なイントネーションの正確な訳出よりも聞き手に高く評価されるとも言われる（Collados Ais, 1998, Aherns, 2005から引用）。以下、特に同時通訳とイントネーションの現象について取り上げた主な先行研究を概観する。

3.1　Shlesinger（1994）

同時通訳に現れるイントネーションは、他の言語使用では見られない特別な特徴を持っていると指摘する Shlesinger は、英語からヘブライ語、ヘブライ語から英語に訳出した同時通訳者の発話を分析した。（プロの会議通訳者の訳出のうち無作為に約90秒の長さの発話片、10個を抽出。うち 6 個は英語からヘブライ語、 4 個はヘブライ語から英語への通訳。ヘブライ語から英語への通訳のうち 2 個はヘブライ語を母語とする通訳者の発話。）通常の発話との違いを比べる目的で、通訳者の訳出を書き起こしたトランスクリプトを作成し、訳出した同じ通訳者に読み上げてもらった。分析は読み上げには表れなかったプロソディー特徴だけを対象に行われた。その結果、通訳者の訳出音声には通常の発話とは違った特徴が確認されたと言い、これを tonality（訳出発話を intonation group、すわなち、情報単位に分割すること）、tonicity（intonation group 内の重要情報を音調核で明示すること）、tone（確実性と非確実性など発話内容に対する話し手の態度を示すこと）、の 3 つの視点から分析した[3]。

まず、tonality について最も特徴的だったのは、文法的単位内部に起きたポーズだった。いわゆる不自然な位置でのポーズが頻出し、これは聞き手の訳文の理解の障害になる可能性が高いと指摘する。また、文末では通常発話と同じく

3　これ以外にもスピード／速さの点でも比較しているが、今回はイントネーションに焦点を置いているためここでは触れない。

ポーズが置かれていたものの、終末よりも非終末を示すことの多い低上昇調のtoneと共起していた。低上昇調は話者の不確実な態度を示すことから、これとポーズが多用された場合の語用論的影響は少なくないと主張する。tonicityについては、stressが適切に使用されなかったために新情報、旧情報の誤認が起こっていた。また、toneについては文末の本来終末を示す下降調が選ばれる箇所で、非下降調が使われていた。

さらにTTの内容理解度調べたところ、通訳者の訳出を聞いた被験者の方が読み上げ発話を聞いた被験者より低かったことが分かり、イントネーションの逸脱は聞き手の理解にも影響を及ぼすと指摘している。

Shlesingerの研究は、同通口調の実態を垣間見る上で示唆的ではあるが、イントネーションの判断が著者の聴覚的印象にのみ頼っていることや、具体的データが示されていないこと、用語の不明瞭さ（たとえば、stressとaccentの区別）などの問題点がある。

3.2　Williams（1995）

Williamsは同時通訳者が内容的に際立たせる理由のない単語にstress置いて発音することが多いのに注目し、その理由を探るため集めた同時通訳データを音響分析した。分析の対象となったのはsource language（SL）のスェーデン語とそれを英語に直した会議同時通訳だった[4]。

比較分析の結果、通訳者の音声訳出の中で誤ってstressを置いて発音されていた単語（B）の直前に、原発話ではstressを置いて発音された単語（A）が表れていたことが分かった。同時通訳では通訳者はSLの文①の訳文を発話しながら文②を聴くことになるが、文②にstressを置いて発音される単語が表れるとそれに引きずられる形で、その直後、もしくは、ほぼ同時に出てくる文①の訳文中の単語まで、その必要もないのにstressを置いてしまうというのである。当然（B）と（A）は別々の文に含まれる、意味的に何の関係もない単語である。（厳密には（A）内のstressの置かれた音節の直後、または、ほぼ同時に出て来る（B）内の音節が、不自然なstressを置かれ発音されていた。）また、（B）のstressのパターンがAのstressのパターンと同じように聞こえることもあったという。

Williams自身、同時通訳で現れるこのようなstressの逸脱が、上記のような機械的な理由だけですべて説明できるわけではないとしているが、同時通訳者はSLの文を聴きながら自分の訳出音声のモニターも行わねばならず、これが

4　通訳者の母語、通訳経験についての記述はない。

stress の混同を引き起こしている可能性があると示唆している。

ただ、Williams も stress をいわゆる word stress の意味で使っているのか、accent や intonation の意味で使っているのか判然としない箇所がある。

3.3　Aherns（2005）

Aherns は三組の通訳者合計 6 人（全員がドイツ語母語話者）が英語からドイツ語に同時通訳したコーパスデータを利用した。三組の通訳者は 3 つのブースに分かれそれぞれ同じ ST の通訳を行い、その様子は音声録音、ビデオ撮影された。ブースⅡの女性通訳者二人とブースⅢの男性通訳者二人にとって英語は B 言語、ブース I の女性通訳者にとって英語は C 言語だった。録音された英語の ST とドイツ語の TT は、その後音声分析された。intonation group への分割は、聴覚判断と音響分析を併用している。

分析の結果、intonation group の数は ST よりも TT の方が多いことが分かった。これは個々の intonation group が短くなっている証拠と言え、作業記憶（working memory）内での情報保持容量を越えないようにできるだけ早く訳出を試みている結果ではないかと推測する。さらに、TT の intonation group を構成する語数を調べたところ、1 、2 語からなる intonation group の数が、ST のそれに比べ 2 倍近く多かったことが分かった。同時通訳ではまるで訳出された文内の単語 1 つ 1 つが強調されたように聞こえることがあるが、intonation group を構成する単語が 1 、2 単語しかなければ、そのうちのどちらかに音調核が来るため、結果的に際立って聞こえる箇所が交互に現れることになるのが原因ではないかと指摘する。また、TT の intonation group の音調核は下降調よりも非下降調（上昇、平坦、上昇平坦）が多く、尾部（tail）が続く場合は、ピッチは上昇後、平坦なまま終わる（rising and level contour）ことが多かった。このような intonation group が連続すると、いわゆる「リスト読みイントネーション」となり、発話がまだ終わっておらずこのあとに重要な情報が来る可能性を示す合図にもなるが、これについては同時通訳では次にどんな情報が来るのか通訳者は分からないため、自然にこのような音調のパターンを取ったのではないかと主張している。

4. 調査および分析対象

上記の先行研究を受け、本論では非欧米語の日本語と英語の同時通訳データのイントネーションの特徴を調べる。使用した素材は2010年 7 月11日投開票の参議院選挙の結果を伝える NHK ニュースの日英同時通訳のデータである。通訳者は日頃から NHK の夜のニュース番組などで同時通訳を担当している日本

人女性通訳者である。

内容はすべて、番組司会者が当落した候補や各党の幹部に行っているインタビューであるが、今回はそのうちから無作為に選んだおよそ10分のインタビューを分析素材として使用した。通訳者の数は二人である。

4.1　分析方法

通訳者の発話をすべて書き起こしたうえで、その後聴覚により発話データをイントネーションの視点から記述し、不明瞭な箇所は音声分析ソフト（杉スピーチアナライザー）を随時使い確認した。具体的には、intonation group に分割し、アクセントと音調核の位置や音調の種類を特定した。（実際の通訳者の発話とイントネーションの表記法は Appendix を参照。）

Wells（2006）は intonation group の構造は基本的には文法構造を反映していて、大方の場合常識の問題（p. 187）としているが、実際にその境界を特定するのは原稿を読み上げるようなケースはともかく、自然発話の場合は聴覚的にも音響的にも容易でないことも多い。Cruttenden（1997）は intonation group に区切る基準として、以下ような条件をあげている。

①（主要統語境界末に来る）ポーズ
②弱起[5]（anacrusis）が見られたときは、一般に新しい intonation groupが始まる。
③intonation group 内の最後の音節は、強勢の有無にかかわらず長くなることが多い。
④アクセントを受けない音節（unaccented syllables）でピッチレベルや方向が変わったときは、一般にそこに intonation group の境界がある。
⑤intonation group は少なくとも 1 つの強勢音節（stressed syllables）を含む。
⑥少なくとも 1 つのアクセントを受ける音節（accented syllables）がある。

④は比較的はっきりとした目安だが、①～③はそれ自体で必ず intonation group の境界を示すわけではなく、⑤⑥の条件を満たしたうえでそのような特徴も共起している場合は、より確かに境界を特定できるという。ここでは原則、上記の基準に従い分割していった。

5　Intonation group 内の最初のアクセント音節の前にある強勢のない音節のこと。この部分は特に直前の intonation group の終端部分と比べるとすばやく発音される。

同時通訳データの場合、特にポーズ（filled & unfilled pause）が出現する頻度が高いが、その場合以下のように処理した。

①ポーズ前の音声単位 A 内にアクセントが見られないとき、その音連続は intonation group と見なさない。

（e.g. / if we ha…/ if the LDP has been Able to re**VIVE** …）
A　B

②音声単位 A で音調核が現れる前にポーズが生じ、その直後の音声単位 B に音調核が見られ、なおかつ、AB が 1 つの情報単位と判断できる場合は、AB を 1 つの intonation group と見なす。

（e.g. Well, we *REAL*ly have to be, um… to res**POND** /…）
A　B

*イタリック大文字はアクセントを受けた音節、太大文字は音調核のある音節、/ は intonation group の境界を示す。

また今回のデータでは数が少なかったが、言い直しの場合、音声単位 A にアクセントが見られても、音調核が表れないまま次の発話に移る場合もある。この場合も A は intonation group とは見なさない。

アクセントと音調核については、ともにピッチを使って prominence を加えることであるのは前にも述べたが、intonation group 成立の条件となる音調核の特定は、主要なピッチの移動や変化が見られるかどうかを基準に行った。

音調の種類については研究の目的に応じてかなりの細分化が可能だが、今回は下降（fall）、部分下降調（semi-falling）、上昇（rise）、平坦（level）下降上昇（fall-rise）の 4 種類に分けた。

5. 結果

以上のような基準に従い、データを分析した。

5.1　intonation group

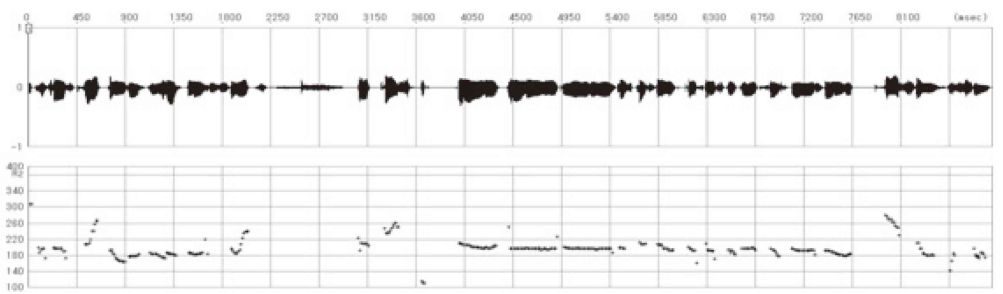
intonation group は原稿を読み上げたような発話と比べ、自発的発話の場合は短くアクセントの数も少なくなる傾向がある（Wells, 2006, p.192）。分析対象となった二人の通訳者の訳出量が異なっていたため intonation group の総数は異なるが、平均語数は約4.5語だった。Cruttenden（1997）は平均で約 5 語、7 語を超えることは非常に少ない（p. 72）と言い、話しことばでは平均して 3 語から 4 語（Esser and Polomski, 1988, p.31）と言われることを考えると標準

的な長さで、特に短いとは言えない。

	IG の数	IG 内の平均語数
通訳者 A	56	4.66
通訳者 B	166	4.52
合計	222	4.56

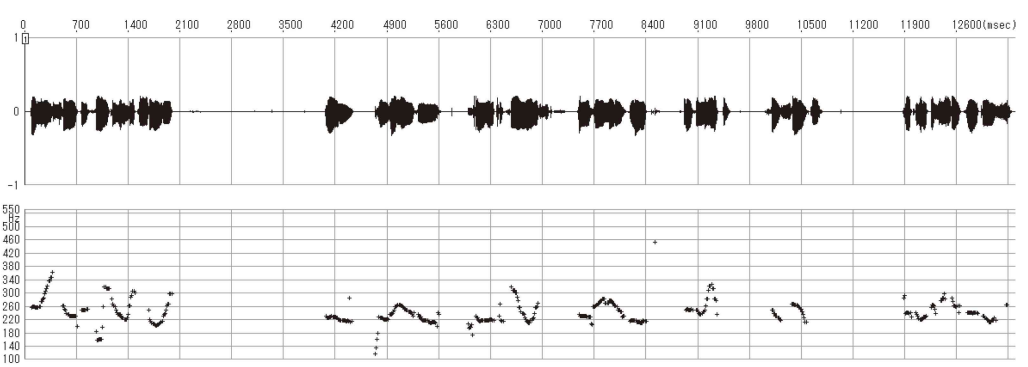
表1.　Intonation Group（IG）の数と平均語数

訳出処理がスムーズに進んでいる箇所では、語数が一気に増えている箇所がある一方、処理に手間取っている箇所では、intonation group が極端に少なくなっている箇所が見られた。



英語通訳文：we're just **HOP**↘ing that / we'll have more **SEATS**↗ / but of **COURSE**↗/ um on.. the.. dis*CUS*sion of consumption tax as well as on the **PEN**↘sion issue /…

日本語原文：議席が伸びるように願っているところですが、やはりー、まあ消費税の議論もそうですし、まあとにかく年金の議論を始めとして・・・



英語通訳文：and **AL**↘so / be*FORE* the e**LEC**↘↗tion,/ um… in *RU*Nnin the.. Diet af**FAIRS**↘↗ / the **RU**↘ling bloc /..did **NOT**↘/…con**SULT**↘ /… with the op**PO**↘sition parties /

日本語原文：それからもう一つは、あのー、選挙前に大変国会運営は、あの審議を尽くさない、都合の悪いことはなかなか審議しないし、乱暴に与野党の間を割り切っていくということがありました。

個別の intonation group の長さは、ポーズや言い淀みなどを含んでいるためばらつきが多いが、主要統語要素内（major syntactic constituent）で IG 境界が生じていた割合は表 2 のように極めて少なく、聴覚的に分かりやすさが損なわれているという印象はなかった。

	IG 境界の数	主要統語境界内生じた IG 境界の数	割合（%）
通訳者 A	56	5	9
通訳者 B	166	10	6
合計	222	15	7

表2.　主要統語境界内で IG 境界現れた割合

一方でintonation group 内に生起するポーズや言い淀みは、全体の半数ほどで起こっている[6]。同時通訳を分かりにくくしている要因の 1 つは、intonation group 内に生じるポーズや、以下のように言い誤りや言い淀みにより音調核が出て来る前にその発話が終了し、次のグループが始まるケースだろう。

a…nd　**AL**so↘ / this was kind of a refe**REN**↘dum /if we ha.. / if the LDP has been *A*ble to re**VIVE**↘↗ /

Well.. *FIRST* and **FORE**↘↗most / there has been a lot of **FLIP**↗- flop /… in the um….…a…/ in the ah *POL*itics and the **PO**↘licies /

We DON'T **KNOW**↘ that / because there are a LOT of uh, um uh…*HEAT*ed contests/ uh *HEAT*ly contested **ARE**.. / um *SI*ngle **DIS**↘tricts /

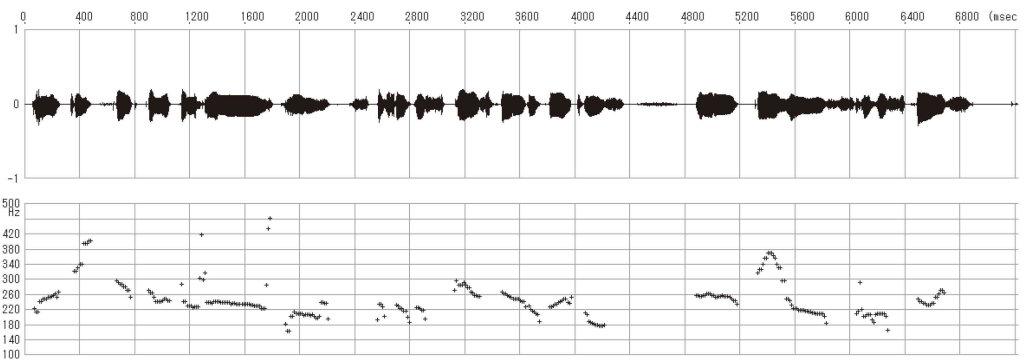
intonation group が統語的・意味的単位とマッチしていたのは、このような潜在的に理解の障害になる要因を補完している可能性がある。

5.2　音調核

音調核は話し手が聞き手に注意を向けて欲しい箇所や、強調、対比したい単

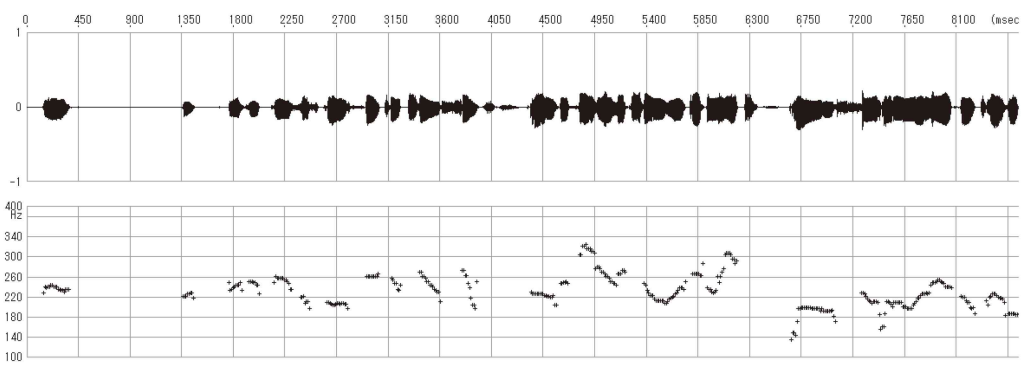
6　今回は暫定的に300ms 以上のものについてポーズと認定した。

語に現れるが、今回のデータについては通訳者の英語訳では大方適切な語に置かれていた。word stress レベルのミスが若干あったものの、少なくとも音調核の位置を間違えたために誤解を招くような箇所は見受けられなかった。



英語通訳文：Well　I *DON'T* **THINK**↘there have been any / --um, SPEcial res**PONSE**↘ /from the **VOT**↘ers / When **THERE**↘↗was..　a response /…

日本語原文：有権者からはほとんど実は、反応らしい反応はございませんでした。エー、反応があると、あったときにはですね、・・・



英語通訳文：**NOW**→../L *L*DP has gained *FOR*ty-two **SEATS**↘ /and before the　**ELEC**↘↗tion /you did **NOT**↘/..um…*SAY*　any numerical **TAR**↘get /

日本語原文：あの一自民党現在42議席なんですけれども、あの谷垣さん、選挙前にはですね、具体的な数字の目標は、仰いませんでした。

1つ目の例の When there was a response では、意味的には was に音調核が来るところで、2つ目の例の you did not..um..say any numerical target でも、原文では特に「仰いませんでした」を強調したような発音にはなっておらず、

not に音調核を置く必要はない。おそらく通訳者の解釈が入ったと思われるが、ともにこれにより聞き手の理解に障害が生じるレベルまではいかないように思える。

興味深い例としては、適切な訳語が見つからなかったり、言い直した時も音調核の音調が同じだった下記のような文である。

Well we REALly have to be, um, to, to res**POND**↘/ res**PECT**↘/ uh rea… ac**CE**↘pt the results / **SQUARE**↘↗ly /

日本語原文：うーん、まああの、謙虚に受け止めなければいけないと思います。

a--nd we **DO**↘ hope that/ …the **Di**et↗ / will be a **VE**nue↗ / a **PLACE**↗ / where we REALly could have sin**CE**↗re / **SE**↗rious eh / dis**CUS**↘sions

日本語原文：そういう基本的議論を積み重ねていく、えー、国会にですね、国民のみなさんは――、変わっていけという風なメッセージではないかなという風に、私は受け止めたいという風に思います。

二つの例とも、言い直しをしても音調自体が変わることはなく同じものが続いている。これは同時通訳の発話プランニングの際、音調核の場所と音調の指定は、実際にどの単語を入れるかの作業と独立して行われている可能性を示唆している。

5.3　音調

二人の通訳者が使用した核音調の種類は圧倒的に下降調が多い。Aherns（2005）のデータでは下降調と上昇調がほぼ同等の割合だったことと比べる大きく違う。

	下降	部分下降	上昇	平坦	下降上昇
通訳者 A	55	7	18	4	16
通訳者 B	78	3	8	4	7

表3 - 1.　音調核の音調の種類（%）

	下降	非下降
通訳者 A	63	37
通訳者 B	81	19

表3 - 2.　下降調と非下降調の割合（%）

同時通訳では訳出作業自体に認知資源を大幅に奪われることや、次に話がど

う展開するのか予測が難しいことなどから、不確実性や留保の意味を持つ上昇調が多くなると予想されるが、今回のデータに関しては、これは必ずしも裏付けられなかった。もともと音調核は下降調が多いと言われるものの、極端に下降調が多い場合も、発話が単調になり自然さは低下すると思われる。

5.4　その他

今回は事実上インタビューの通訳であるため、一人の通訳者が質問者と回答者両方の発話の通訳を行っていて、話者の区別をつける音声的工夫が必要となる。話者の切り替えを示すのにポーズを入れるのは一般的な手法だが、その長さは後続の訳出部の難易度や訳出の遅延により変わってくる。一つ興味深かったのは、通訳者 A が原話者の感情の変化をピッチの上げ下げで表現しようとしている箇所だった。回答者が選挙の敗北を認めるくだりで声が暗くなっているときは、それに合わせ通訳者も低いピッチから訳出を始めていた。通訳者は第三者としてでなく、スピーカーが話しているかのように訳出するように求められるが、同時通訳という状況でもイントネーションでこれを示そうしていることが推察される。

6. まとめ

Intonation group については、Ahrens（2005）は 2 語からなるものが40%前後あったと報告しているが、今回のデータは通訳者 A、B ともその半分にも達していない（それぞれ、17%と16%）。そのためか聞いたときも、同通口調の一因とされる「まるですべての単語に stress を置いているような発音」（ibid, p.66）が皆無とまでは言わないが、全体的な印象としてはかなり滑らかであった。同時通訳では普通の会話以上に intonation group が短くなるのは理解できるが、 4 割もの intonation group が 2 語というのは少し多過ぎるように思える。Ahrens（2005）の実際の音声データを聞くことができないが、今回の分析データに比べるとかなりの disfluency が予測される。

さらに音調核の位置の逸脱も極めて少なく、使われた音調の種類でも予想されたほど上昇調が使われてはいなかった。これらの結果は先行研究の結果とは異なる。これは今回の素材が選挙結果を伝える速報番組であったものの、その結果が事前に予測されていたものに合致するものであったため、内容の予測が必ずしも困難でなかったことも関係している可能性がある。同時通訳者のイントネーションは、訳出素材の難易度や予測のしやすさなどもろもろの要因が重なり合うことにより、音調核の使い方、使用される音調の種類、幅が変化すると考える方が自然なのかもしれない。一方で通訳者 A は B に比べ 2 倍近くの

非下降調を使っており、個人差もある程度考慮に入れる必要があると思われる。

今後さらにデータの蓄積を進める際は、1）通訳素材の難易度、2）通訳者の母国語、3）通訳歴の要因を踏まえる必要がある。分析する際は研究者が共通の枠組み、基準を採用する必要もある。イントネーションの記述は音響分析により高い精度で行われるようになった半面、同時通訳を含む unprepared text の場合、前核部のアクセントと音調核の区別も含め、必ずしも音響的手掛かりでは判断できない側面もあり、この点は特に重要だと思われる。

7. 終わりに

今回の調査はデータ量が十分でなく予備的な位置づけではあるが、日英同時通訳者の発話の音声特徴の一端は垣間見ることができた。今後は、今回扱わなかったポーズ、リズム、発話スピードも含めさらにデータの蓄積分析を進め、同時通訳者のプロソディーの全体像を明らかにしていく必要がある。ただ課題も多い。今回は10分程度の素材であったにもかかわらず分析にはかなりの時間を要した。データ蓄積には複数の研究者が協力して取り組むことが欠かせない。

非母国語へ通訳する通訳者の発音上の問題は、幼少時から青年期にかけ英語圏で過ごし、発音がネイティブスピーカーと同等のケースを除いては、いわゆる第2言語および外国語としての英語学習者と共通することが多い。この分野の研究では、現在、学習者にネイティブのような発音を目指させる必要はなく、intelligibility の観点から発音到達目標を考える流れも出てきている（Jenkins, 2000）。通訳者への発音訓練は基本的には個人の努力に任されていて、ネイティブをモデルにしたものが主流だが、通訳訓練において発音に費やす時間がおそらく限られていることを考えると、intelligibility を重視したアプローチを取ることは一考に値すると思われる。この分野はまだプロソディーレベルの研究が不十分でさらなる研究が期待される。

近藤（2005）はB言語への通訳について日本人プロ通訳者がどう考えているのかをアンケート調査しているが、同僚通訳者の評価の項目で「日本語の output（＝日本語への通訳）ではなんとか合格点を取れていても、英語（への通訳）となるとあまりにひどい performance の通訳者を何人も（同僚として）経験してきました。L や R の区別ができない人…」（pp.269-270）など、発音については厳しい評価が出ている。これは通訳者自身が暗黙のうちに発音のモデルとしてネイティブスピーカーを想定していることを示唆している。冒頭にも述べたように、通訳者の訳出音声の研究は、最終的に通訳者の発音訓練に寄与すべきものであるが、そのためには発音モデルの共有は欠かせない。今後も当然のごとくネイティブスピーカーをモデルにした練習を推奨するのか、

English as an international language の視点からモデルを設定するのかも議論していく必要があるであろう。

＊なお、本研究は、平成21 － 24 年度文科省科学研究費補助金基盤研究（C）「同時通訳に見られる概念的複合の検証」（代表：船山仲他）の援助を受け行われた。記して謝意を表する。

参考文献

Ahrens, B.（2005）. Prosodic phenomena in simultaneous interpreting: A conceptual approach and its practical application. *Interpreting* 7(1), 51-76.

Alexieva, B.（2001）. Interpreter-mediated TV live interviews. In Y.Gambier & H. Gottlieb（eds.）,（*Multi*）*Media Translation: Concepts, practices, and research*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. pp. 113-124.

Altman, J.（1989）. The Role of the Tutor Demonstration in Teaching Interpreting. In Gran, L. & Dodds, J.（eds.）, *The Theoretical and Practical Aspects of Teaching Conference Interpretation*. Udine: Campanotto Editore, pp.237-240.

Barik, H.（1972）. Interpreters Talk a Lot, Among Other Things. *Babel* 18(1), 3-9.

Cruttenden, A.（1997）. *Intonation. Second Edition*. Cambridge: Cambridge University Press.

Esser, J. & Polomski, A.（1988）*Comparing Reading and Speaking Intonation.* Amsterdam: Rodopi.

Jenkins, J.（2000）. *The Phonology of English as an International Language.* Oxford : Oxford University Press.

Kurtz, I.（1989）. The Use of Video Tapes in Consecutive and Simultaneous Interpretation Training. In Gran, L. & Dodds, J.（eds.）, *The Theoretical and Practical Aspects of Teaching Conference Interpretation.* Udine: Campanotto Editore, pp. 213-216.

Shlesinger, M.（1994）. Intonation in the production and perception of simultaneous interpretation. In Lambert, S. & Moser-Mercer, B.（eds.）, *Bridging the gap: Empirical research in simultaneous interpretation.* Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins. pp. 225-236.

Wells, J.C.（2006）. *English Intonation*. Cambridge: Cambridge University Press.

Williams, S.（2005）, Observations on anomalous stress in interpreting. *The Translator* 1（1）, 47-64.

近藤正臣（2005）「B 言語への通訳：日本の経験－アンケート調査報告」『通訳

研究』第 5 号：261－283.

APPENDIX

通訳者の発話データ例　（[T] はキャスター、[F][K]は政治家、[P] は記者。なお、punctuation は表記されていない。）

＊　↘ ＝ 下降調　↗＝ 上昇調　－ ＝ 平坦調　↘↗下降上昇調
アクセントは大文字イタリック体で、音調核は太大文字で記されている。

通訳者 A

[T] Now we *GO* **O**↘ver / to … the **O**－ffice of…/ TEtsurou **FU**↘kuyama/ *DE*puty cabinet **SEC**↘retary / of the DP **J**↘…office / now you are now in the po**SI**↘↗tion / in the..PRIme minister's official **RE**↘sidence/ to sup**PORT**↘ the prime minister / DID you an**TI**↘cipate / such a difficult **STRUG**↗gle/

[F] Well we REALly have to be, um, to, to res**POND**↘ / res**PECT**↘ / uh rea … ac**CE**↘pt the results / **SQUARE**↘↗ly/

[T]**NOW**－ / um is the conSUMPtion tax **HIKE**↘ / **ISSUE**↘ / is it af**FECT**↗ing the results/

[F]Well LOOKing at various o**PI**↘↗nion polls /(long pause)… I think uh **HALF**↘of the voters /THOUGHT that consumption tax i is… RAIse is **NE**↘cessary / and I FEEL that… PRIme Minister raised this **ISSUE**↘↗/ in order to START dis**CUS**↘sion / on the **FU**↘ture / of uh JaPAN's national **FI**↘nances / and I THOUGHT this could be a good oc**CA**↘sion / to **START**↘that discussion / so on this iss **POINT**↘ / I think we **WERE**↘ able to / *WIN* a sup**PORT**↘ / to a certain ex*TENT* among the **PEO**↘ple /

[P]Mr. **FU**↘kuyama / so the ruling party **BLOC**↗/ is *LOS*ing a ma**JOR**↘ity/ so it will be indis**PEN**↘sable / for you to be cooperating with the oppo**SI**↘tion parties / As a *DE*puty cabinet **SE**↘↗cretary / WHAT is your po**SI**↘tion /

[F]Well we DON'T know the **ALL**↘↗ the results of the votes yet/ um we just ho... / we're just **HOP**↘ing that / we'll have more **SEATS**↗ / but of **COURSE**↗/ um on.. the.. disCUSsion of consumption tax as well as on the **PEN**↘sion

issue / we'll have to start dis**CUS**↘↗sion / with various **PAR**↘↗ty members /uh on.. the **BILLS**↘/ and we'd like to **ASK**↘ for cooperation / wherever.. we **CAN**↘ / a--nd we **DO**↘ hope that/ …the **Di**et↗ / will be a **VE**nue↗ /a **PLACE**↗ / where we REALly could have sin**CE**↗re / **SE**↗rious eh / dis**CUS**↘sions / and I THINK the people are expecting us to **DO**↘ so/

通訳者 B

[T] Now we go to …at the cam*PAIGN* office of Mr. Yutaka **KU**↘magai / in Miyagi **PRE**↘fecture / LDP **NEW**↘comer/ *GOOD* **EVE**↘ning/ Now THIS uh Miyagi …electoral **DIS**↘trict / *HAD* also another **CAN**↘didate / Wha.. *HOW* was the um cam**PAIGN**↘

[K]Well.. I am a new**COMER**↗ / so…I just *SAID* what is **NA**↗tural / a--nd ex*PLAINED* what **I**↘ can do /a-nd I've ac**CU**↘mulated / what **I**↘ can do /

[P]*GOOD* **EVE**↗ning / Now about the con*SUMP*tion **TAX**↘..hike / um I believ.. / SOME **SAY**↘that / the DIFference between the DPJ and LDP is difficult to **SEE**↘ / *HOW* did the view, voters um **POINT**↘/

[K] Well I *DON'T* **THINK**↘there have been any / --um SPEcial res**PONSE**↘ /from the **VOT**↘ers / When**THERE**↘↗was.. a response / it's when they **SAID**↘that / they are having very **DIF**↘ficulty / they…there's no um ..**PAY**↗ment raise / a--nd it will be very **DIF**↘ficult / if the con*SUMP*tion tax goes **UP**↘ / I believe *THAT* was the major o**PI**↘nions of the voters/

[P]Now Mr. **KU**↘magai / are you your**SELF**↘ / *HOW* do you **THINK**↘about raising the ta../ con*SUMP*tion tax **TAX**↘/

[K]Now in this def**LA**tion↘↗ / um the the con*SUMP*tion has been very **SLUG**↘gish / a-nd…the domestic… um *FI*nances've been very **TIGHT**↘ / so-- I'm NOT um really sup**PORT**↘ing / *RAIS*ing the con**SUMP**↘tion /

[P,T] **THANK**↘ you very much /